愛知・朝日西遺跡

1　所在地　愛知県西春日井郡清洲町

2　調査期間　一九八五年（昭60）五月～九月

3　発掘機関　㈶愛知県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　遠藤才文・佐藤公保・安藤義弘

5　遺跡の種類　城郭跡・都市跡

6　遺跡の年代　平安時代末期～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

朝日西遺跡は、五条川の形成した自然堤防の東岸に位置する。当遺跡の南西約一kmには清洲城本丸跡がある。対岸の清洲城下町遺跡と共に、当遺跡は中世末から近世初頭には清洲城下の一画を占め、外堀と中堀（旧五条川）に挟まれた町人地と寺社地が展開する。

（名古屋北部）

発掘調査は、一九八一年より名古屋環状二号線建設に伴う調査として継続して行われ、一九八五年度の調査を以て終了した。

一九八五年度は本道部五ヵ所の調査が行われた。木簡及び墨書曲物が出土したのは、東端の調査区のSD〇一とSD〇三である。

SD〇一は、一九八四年度の調査で慶長三・四年（一五九八・九）銘の卒塔婆と文禄二年（一五九三）銘の施釉陶器碗が出土したSD一三に接続し、東西方向へ走り、東端はSD〇三の手前で終る。幅五～六m、深さ一～一・二mを測る。木簡の出土した地点はSD〇一のSD〇三よりの端で、溝最下層の粘質土中より出土した。

SD〇三は南北方向へ走り、西側に幅二・五～一二mの犬走りを有する。犬走りを含めた幅は一七・五～二七m、深さは二・五mを測る。『清洲村古城図』（蓬左文庫蔵）によると、同溝は外堀の位置と一致しており、また同溝の東側には同時代の遺構がないことから、外堀と考えられる。木簡と墨書された曲物は最下層の粘質土より出土した。

これらの溝は堆積状況及び共伴遺物より、一六世紀末から一七世紀初頭にかけて共存しており、SD〇一とSD〇三（外堀）に画された地区は、木簡以外に「南無阿弥陀仏」と墨書された卒塔婆がSD〇一より出土していること、町家に比べ区画面積が広いこと等から、城外を臨む寺社地と想定される。

8　木簡の釈文・内容

SD〇一

(1)

「かちや町

『六』十六間三尺六寸

是より北　」

291×40×2　051

SD〇三

(2)

・□□小□所〔牧カ〕　」

・□□□□□□小□所〔牧カ〕」

(318)×27×2　059

(3)

「白さたう

壱斤」

高さ98　復元径100　厚さ1.5　061

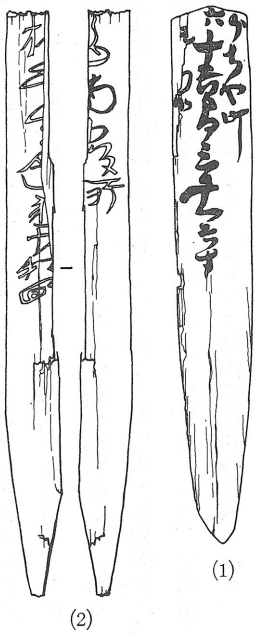
(1)(2)の木簡にある「かちや町」「小牧」町は、共に文禄二・三年（一五九三・四）に実施された「清須　町家改」（『駒井日記』）の日比野下野請取分の一二の町の中に見られる。このことから、「かちや町」「小牧」町を含めた一二の町は、本丸から北東方向にあたる朝日西遺跡周辺に位置していたと考えられる。(1)の「十六間三尺六寸」は「かちや町」の奥行きを示すものと推定され、町割の計画性がうかがえる。これらのことから、朝日西遺跡の西側を通過していた小牧街道沿いやその周辺には、「かちや町」「小牧」町等の一二の町が一定の区画を有し展開していたと考えられる。なお、(1)(2)の木簡の性格については検討の余地があるが、清洲城下町の町割に関わる木簡として興味深いものである。(3)は一重巻きの曲物の側板外面に墨書されており、底板は欠く。

なお、木簡の釈文に関しては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9　関係文献

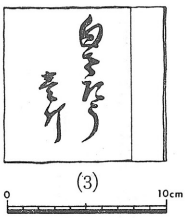
(財)愛知県埋蔵文化財センター『年報　昭和六〇年度』（一九八六年）

（佐藤公保）



(1)

(2)



(3)

0　10cm